

博士學位論文要約

Summary of Doctoral dissertation

論文題目： 存在の狂気
—反政治哲学としてのハイデガー—

氏名： 中井 大介

要約：

本研究の目的は、20世紀ドイツの哲学者マルティン・ハイデガー(Martin Heidegger, 1889-1976)における存在の思索を、「反政治哲学」として位置付け、解釈するものである。より具体的に言えば、思索者／詩作者を巡る彼の哲学議論を「言語」と「時間性」の視座から再検討することで、ハイデガーの解釈学的実践を、日常世界の既存の意味秩序をラディカルに破壊し、世界の「新生」を準備する、言語論的实践であったことを明らかにすることが目的である。なお、本稿は本論全5章＋序章・結論で構成されている。

まず序論では、存在論を巡る政治哲学の歴史を概観することで、その問題構制を明らかにした。伝統的な西洋形而上学は、存在論の亡霊に取り憑かれてきた。例えば、プラトンは『国家(ポリテイア)』の中で、ポリス(理想国)の政治秩序の最終的な根拠を神話に求めた。このように、西洋形而上学は存在者の存在を神話的な存在者の物語に偽装することで、存在を忘却してきたのだ。これに対して現代の分析系哲学は、言語ゲームの外部(語りえぬもの＝存在)に対して沈黙を貫く。存在論を巡るこうした哲学史的状况を整理した上で、西洋形而上学を批判し、存在論の復権を目論んだハイデガーの政治哲学的立ち位置を、従来の政治秩序の根幹を揺るがす「反政治哲学」として特徴付けた。そして、ハイデガーは詩人の語る狂気の言葉に、就中ヘルダーリンの詩的言語の中に、存在の思索の極致を見出したのである。

第1章では、『存在と時間』の政治学的読解を通じて、現存在の非本来性と本来性の議論におけるその反政治哲学的意味を検討し、本来的現存在の反政治哲学的実践を「解釈学的実践」として明らかにした。すなわち、現存在の非本来性は既存の政治的意味秩序を成立させるための条件であるのに対して、現存在の本来性はそうした意味秩序をラディカルに解体する契機を有していることを明らかにした。解釈学的な循環構造を通じた意味秩序の間断なき反復(解体と新生)、これこそが現存在の本来的自由としての解釈学的実践なのである。

次に第2章と第3章では、『存在と時間』以降のハイデガーの存在の思索を、文体論ないしテキスト論を中心に検討することで、解釈学的実践の内実をより具体的に明らかにした。

まず第2章では、『存在と時間』が中断された理由を、中期のヘーゲル講義を手がかりに明らかにした。中断の理由は、テキスト内部の単なる論理的欠落にあるのではなく、時間性の不在にあった。絶対的な「始まり」には差異の「傾き」が必要である。しかし『存在と時間』において示された「存在論的差異」には「傾き」が存在せず、故にテキスト自体が絶

対的な「始まり」に開かれていなかったのである。テキストの閉じた円環ないし体系を切断し、別の新たな経路（地平）を切り拓いていくこと、そうした解釈学的実践が『存在と時間』を中断させるに至ったのである。

第3章では、古代ギリシアとの対決を、具体的には、プラトン講義とアナクシマン드로ス論における存在と真理の思索を検討することで、全集序文に掲げられた箴言「(これらは)諸々の著作ではない、道である」の意味を検討した。ハイデガーは古代ギリシアの哲学的諸概念を新たな言葉で翻訳する。こうした彼の翻訳作業は、過去のギリシアの言葉を単に機械的・辞書的に「置き換える」のではなく、彼ら原初の思索との根源的対決を通じて、ドイツに真に固有の言葉（民族）を反復的に到来させる解釈学的実践であったことを明らかにした。これは序文の役割も同様である。テキストは書かれた時点で既に死んでいる。それらの死んだテキストを再び取り集めて全集という形で「新生」させる。こうして新生した各テキストは複数の「道」である。これは、各々のテキストが全集という全体として体系的に再構成されていることを意味しない。むしろ各々のテキストが各々の経路（道）に開かれていることを、全集序文は示していたのだ。

次に第4章と第5章では、ハイデガーにおける存在の思索を、時間論と言語論を中心に検討することで、詩人の狂気という言葉を通じた世界の「新生」として明らかにした。すなわち、第2章と第3章の主題がハイデガー自身の反政治哲学的な「実践」にあるとするならば、第4章と第5章の主題はハイデガーの反政治哲学的な「政治哲学」である。

第4章では、共同体を巡る時間性の議論を中心に検討することで、悪名高き「民族」概念の反政治哲学的な位置と意味を明らかにした。『存在と時間』の中で明確に示されているように、頹落形態としての世人とは、存在の時間を忘却した現存在の非本来的な存在様態であり、それ故に新たな「始まり」の契機に、すなわち世界の「新生」をもたらす存在の思索からは疎外されている。これに対して、非本来性から本来性へと現存在が覚悟的に移行することは、三次元的な空間的共同性から四次元的な時間的共同性への次元的な変換を意味する。非本来性と本来性は単なる二項対立的概念ではなく、次元の位相における集合関係（非本性は本来性に含まれる）として特徴付けられるのだ。したがって、こうした本来性を有した共同体とは、新たな「始まり」を到来的に反復させる解釈学的実践の共同体であり、詰まる所ハイデガーにおける「民族」概念とは、かかる解釈学的実践を通じて既存の意味秩序をラディカルに無化し、無意味から新たな意味を生起させる時間的な共同体なのである。

第5章では、ハイデガーの詩人論ないし言語論を、就中ハイデガーが最も重要視した詩人ヘルダーリンの講義を中心に検討することで、前章で示した時間の本来的移行が、詩人の狂気という言葉によって準備されることを明らかにした。まず、デリダとラカンの議論を補助線として参照することで、言語の働きを「換喩」と「隠喩」において整理した。換喩が別の言葉を指し示す水平的な言語運動であるのに対して、隠喩は存在の出来事を語る垂直的な言語運動である。無意味から新たな意味を生起させる狂気の詩人の言葉は、こうした言語の隠喩性に存している。ハイデガーによると、詩人は「自覚的に下降に向かう」存在である。それは太陽の熱のように「散逸・摩耗」を引き受けた者であり、「世俗の人々に別れを告げた者」である。そのなかで詩人は孤独に言葉を語る。それはあらゆる有機的組織化

から隔てられた「器官なき身体」(アルトー)から、すなわち自己の存在の奥底から発せられた「沈黙の叫び」であり、本来的に自由で真に固有の言葉である。こうした言葉は、異国(ハイデガー／ヘルダーリンのドイツにとっては古代ギリシア)との対決を経てはじめて将来的に反復される。こうした将来的反復の瞬間を、換言すれば「新生」の瞬間を、ヘルダーリンはまさに「祝祭」と呼んでいるのだ。ドイツ固有の民族は、詩人のこのような狂気という言葉に導かれてはじめて「新生」される。

以上から、ハイデガーの存在の思索／詩作は、理想的な秩序構想を合理的に目指す従来の政治哲学とは全く異なるものであり、むしろこうした秩序構想自体を根底から揺るがし、破壊する可能性を大いに有した「反政治哲学」として理解されなければならないことを明らかにした。ハイデガーは、詩人の狂気という言葉を通じて、存在の出来事を、すなわち無意味から新たな意味が到来・生起する瞬間を捉えようとする。詩人の狂気という言葉は世界に「新生」をもたらす言語であり、かかる「始まり」をもたらす詩的な狂気の営みこそが、『黒ノート』において「メタポリティーク」と名付けられたハイデガーの「政治」なのである。